

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
◆ 目指す人間像 進取の気性、敬愛の精神、雄健な心身を備え、新たな価値を創造する人。 ◆ Mission 主体的・探究的な学びをとおして、確かな学力と挑戦心を育み、変化の激しい社会を逞しく生き抜く基盤を培う。 ◆ Vision 学習活動や特別活動が高いレベルで充実しており、難関大学進学にも信頼のおける「生徒が育つ学校」となる。	◇ 「挑戦」することを本校の教育の柱として位置づけ、学年集会や個別面談等、様々な機会をとおして生徒に働きかけた。進路に向けて、高い目標を堅持して努力を続ける生徒が増加した。 ◇ 探究活動やグループワークの推進、ICTの活用等をとおして、生徒一人ひとりの学びへの意欲を高める工夫を重ねた。普通科総合的な探究の時間の改善に道筋をつけることができた。生徒が自ら学ぶ授業への改善及びICTの効果的な利活用に向けて実践研究をさらに進めていく。 ◇ スパートゼミでは、生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現に向かうよう工夫を行った。主体的・自立的に学習し、高い目標に挑戦する生徒の育成に向けて取組の充実を図る。 ◇ 生徒実行員会を中心に文化祭・体育祭を開催するなど、生徒が主体となって活動することに重点を置いた。中・短期の海外留学や国際交流等をとおして生徒の活動意欲や国際性を高めることができた。 ◇ オーストラリアターム留学を予定どおり実施することができた。実施後の教育活動がより効果的なものとなり、中高一貫教育がさらに充実・発展するよう研究を進めるとともに、円滑で安定した実施に向けた検討を行う。 ◇ 限られた時間内に質の高い部活動ができるように計画・指導した。全国大会や近畿大会への出場、コンクールでの上位入賞、地域貢献活動などにより、生徒の満足度や活動意欲が高まった。 ◇ 前年度に検討した業務改善策の実践などにより、業務負担の軽減が一部で見られた。	① 生徒への働きかけや語りかけ、さらには教職員の姿勢をとおして、「挑戦する文化」を校内に醸成する。生徒一人ひとりの個性や能力を伸ばし、「生徒が育つ」学校へと進化を図る。 ② 生徒が学ぶ授業や探究的な学びの実践、授業におけるICTの効果的な活用をとおして自らの興味関心や進路希望に合わせて主体的に学び考える力を育む。 ③ 質の高い授業と難関大学合格に向けたスパートゼミ、自学自習を支える教材の開発・提供を効果的に組み合わせて、希望進路の実現を図る。 ④ 生徒が企画・運営する学校行事・国際交流等の実施、生徒会活動・部活動・地域連携活動の活性化など、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を充実させる。 ⑤ STEAM教育及びターム留学を軸とした中高一貫教育のさらなる充実・発展を図るとともに、DXハイスクール指定を生かした探究活動を推進する。 ⑥ 互いの人権や多様性を尊重し合い、信頼と思いやりで結ばれ、ともに成長できる人間関係を育む。 ⑦ 教育目標をより明確化することで業務の効率化を図り、ワークライフバランスに係る具体的な取組の検討を継続して行う。

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
教務部	主体的な学習者を育成するために、質の高い授業や生徒が主体的に学ぶ授業のあり方を検討する。	生徒の興味関心を高めるとともに、「生徒が学ぶ」授業の効果的な取り組みについて研究するとともに、内容を共有し協議する機会を学期に1回を目安に設定する。	B	A	「生徒の主体的な学びのための授業改善」をテーマに教職員研修の場を設定し、明確な目標をもって取り組むことができた。また、授業互見週間を学期ごとに実施することで、ICT活用や授業実践の工夫、生徒への学習の動機付けなど、授業実践の情報共有の機会を増やすことができた。次年度も協議を重ねながら質の高い授業の実現への取り組みを継続していきたい。
		教員の授業改善の機会として、授業公開期間を学期に1回を目安に設定する。	A		
	主体的探究的な学びを実践するための効果的なICT活用の方法について検討する。	生徒の学びの意欲をのばし自ら学ぶ姿勢を育てるためにICTの効果的な活用方法について実践研究し、授業公開期間を中心にその内容を共有し協議する。	B	B	
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒会や各種実行委員会と連携して生徒が主体的に学校行事を企画・運営する能力を養い、「生徒が作り上げる学校行事」を実現させる。	A	A	南陽祭(文化祭・体育祭)実行委員と生徒会を中心とした生徒主導の行事の企画・運営を行い、大いに盛り上がった。 生徒会活動では、かもフェスやかもまつりへの参加、チャリティ企画、あいさつ運動などに取り組み、昨年度よりも活発に活動できた。
		生徒主体の効率的かつ合理的な部局活動ができるよう顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。	B		
		生徒会活動のさらなる活性化を図る。	A		
	組織的な生徒指導を実践する。	生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制を構築して全教職員で一貫した指導を行う。	A	A	全教職員による統一した指導をめざして教職員研修を行った。 生徒観察シートやいじめ調査を活用し、生徒の状況把握に努め、気になる生徒の情報を教員間で共有した。 生徒指導事案に際しては、学年部と連携して対応することができ、継続的な指導を行っている。
		個々に応じた効果的な指導を行うと共に、協働的活動を支援する環境を構築する。	B		
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員・家庭との連携を迅速に行うとともに情報共有を円滑に行う環境を構築する。	A		
	生徒・教職員の人権意識の深化を図る。	教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。	A	A	映画を用いた研修会を行い、教職員の人権意識を高めることができた。 講演会や支援学校との交流を通じて、生徒の人権意識を高めることができた。
		地域の団体や教育機関と連携しながら、生徒の人権意識を高める活動を企画・実施する。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
進路指導部	難関大学進学に向けた効果的な進学講習やスパートゼミを開講する。	進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、確かな学力の定着を目指した進学講座を編成・実践する。	A	A	3年生の冬期講習に情報を開講するなど教科・学年と連携し、生徒の実態にあわせた進学講座を実施した。 スパートゼミにおいて各開講講座のねらいをより明確にすることにより、生徒の学習計画の設定に寄与することで、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成した。
		高3生対象のスパートゼミへの取り組みを通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成する。	A		
		各々の学年との連携を密にして効果的なキャリア教育実施計画を立案・実施し、生徒の希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。	A		
	「生徒の学びたい」を刺激する。	魅力的な自習室を整備し、自学自習の学習環境・形態を学校としてサポートする。	A	A	生徒自身がキャリアを選択・決定していく姿勢を支えるために、積極的に放課後の進路イベントを実施できた。 生徒自身がICTを活用し、自らの進路に主体的に向き合っていけるような方法を工夫した。
		ICTを効果的に活用し、生徒が自身のキャリアを選択・決定していく姿勢を支える。	A		
		進路委員を中心として、生徒が進路行事等に積極的に参画する体制を整備し、生徒と共に本校の進路指導を創る。	B		
	各模擬試験データの分析をし、指導に活用する。	学級担任・教科担当者が自らFINEシステムやデジタルサービスを活用して学習指導に活かせるように、教員集団としての情報分析力を高める。	A	A	模擬試験等のデータを教科担当者、学年部と連携し、学校として指導状況の共有、方法の蓄積を行った。
		各模擬試験データを各々の学年と進路指導部の協働体制で分析し、情報を教員間で共有することにより、見通しをもった指導を行う。	A		
保健部	「自分の健康は自分でつくり、守っていく」という意識を育む。	保健委員会発行の「well-being」や保健室だより、学年ごとの健康教育を通じて、正確でタイムリーな知識を伝える。	A	A	「well-being」や保健室だより、健康教育を通じて、今必要な情報を伝えることができた。 生徒の出欠状況や体調の把握を確実に行うため、欠席連絡フォームへの入力徹底を引き続き周知していく。
		欠席連絡フォームや健康調査、教職員間での情報共有を通じて、生徒の健康状況を把握し、体調不良者への適切な対応を行う。	B		
	支援を必要とする生徒に、組織的・継続的に対応する。	学年部・教科担当者等と連絡を密にして生徒情報を共有し、学校適応指導会議とも連携を図る。	A	A	学年部などと生徒情報を共有して支援に当たることができた。必要時に外部の関係機関と速やかに連携を図ることができるように、今後も情報収集し、体制を整えておきたい。
		特別支援教育コーディネーターとの情報共有に努め、必要に応じて外部の関係機関との連携を図る。	B		
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	清掃用具の整理などの美化委員会活動、教職員による清掃指導の充実を通じて、校内全体の美化意識の向上につなげる。	B	A	必要な備品整備を推進し、清掃活動に取り組むことができた。今後も清掃指導についてより足並みをそろえ、美化意識のさらなる向上をめざす。
		月例清掃等を試験等の行事前に設定し、場にふさわしい環境を整える。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
図書部	読書活動を通じて、生徒が自ら学び、主体的に知識や教養を身に付ける力を育む。	新着図書の選定を十分に行うとともに、館内の書籍を厳選することで、生徒が良書を手に取りやすいように整備する。	A	A	本の選定やその配置など、図書環境の整備に努め、生徒がより利用しやすいように工夫することができた。 ビブリオバトルや読書月間などの行事では、図書委員を中心とした生徒の協力と多くの先生方のサポートにより、充実した行事になるとともに、生徒の主体性を発揮する場となった。 図書館からの情報発信についても、一定できているので、さらに生徒に浸透する工夫をしていきたい。
		団体鑑賞などの行事に関連する本を展示したり、ビブリオバトルや読書月間の活動を通じて、図書館利用のきっかけづくりをする。	A		
		図書だよりやTEAMS配信を活用し、図書館の活動やおすすめ本の紹介などを行い、タイムリーかつ効果的な情報発信ができるよう工夫をする。	B		
	図書館での活動を通じて、想像力を膨らませ、創造力を高める場として活用できるようにする。	図書委員と共同して図書館の在り方を考え、より多くの生徒が効果的に利用できるように活動を行う。	B	B	「主体的に図書館を利用する」、「創造力を高める」、「新しい価値を生み出す」という部分では、不十分なところもあるため、生徒や教職員とさらに連携を深め、図書館がより効果的に活用できる場所となるように整備・発展させたい。
		教科の先生方と連携し、授業や探究活動で利用できる書籍を増やし、知識だけでなく新しい価値を創造できる場を提供する。	B		
		ベランダを開放したり館内の整備を進め、生徒にとってより過ごしやすい空間にすることで、多くの生徒が利用できるようにする。	A		
企画研究部	国際交流活動を通じて生徒の主体性を育成する	国際交流フェアなど留学・国際交流活動に関する広報を充実させることにより、生徒が積極的に海外交流に参加できる土台を作る。	A	A	台湾・オーストラリアの学生との交流事業などの国際交流活動を生徒の主体性を活かしながら実施することができた。また広報活動についてはこれまで実施してきた国際交流フェアに加えて、保護者・生徒が留学エージェントと相談する取組（キックオフミーティング）を初めて開催するなど、生徒のニーズに合わせた広報活動を行うことができた。
		国際交流活動において、他分掌、教科、保護者や地域と連携を密にし、生徒が主体的に計画・実行できる土壌を作る。	A		
	広報活動において、ICTの利活用を含む様々な方法を用いて、生徒の活動を校内外へ発信する	ホームページやSNS等を利活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施する。	B	A	学校説明会等において、これまでサイエンスリサーチ科の生徒のみが行っていた探究活動の取組発表を普通科の生徒も参加するプログラムに変更するなど、これまで以上に生徒が説明・発表等を行う取組を実施することができた。今後は特にSNSについて、一層の充実を図っていきたい。
		オープンキャンパスなどの広報活動において生徒が主催する企画や生徒が活動する企画を積極的に導入することで、生徒の主体的な取組を学校内外に発信する。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
探究推進部	一貫教育の俯瞰と充実	6年間の教育活動を踏まえた上で、保護者や教職員に特色的な教育活動の周知を図り、組織的かつ継続的教育活動の充実を目指す。	A	A	中1から高1までの保護者を対象に1期生の実績と分析を踏まえ、保護者説明会を実施できた。 中高一貫教育と学年運営について教職員研修を行った。 中学の教科担当者との連絡は教科ごとの特性もあり不十分であったが、ダ・ヴィンチⅠでは新たな取り組みも含め、活性化した。 業者によるコンピテンシー評価を導入した。次年度以降その運用を具体的に計画することができた。 ダ・ヴィンチ通信の発行により、学校内外に活動の見える化が図れた。 総探では「くまなんフェス」の開催など地域に貢献する活動が見られた。
		中学の学年や教科担当との情報共有を密にし、教育活動に対してのサポートをする。	B		
	ダ・ヴィンチ, サイエンス, 総探の具体化と実践	南陽の魅力やあり方を踏まえた教育活動の計画・実行に携わり、新規事業を含め、その活性化を図る。	A		
		学校内外に対して、教育活動を発信し、南陽の特色の理解を図る。	A		
	ターム留学の計画・実施・案内	2回の実績を踏まえた今年度の実践計画の策定を行う。また、帰国後のフォローアップを学校全体に広げていけるような教育活動を検討する。	A	A	世界の情勢等に応じて、適切な留学準備ができた。 各学年に応じて計画的に留学に向けてのケーススタディーや講演会などが実行できた。 留学後のフォローアップについては今後その充実に向けた活動の検討が必要。
		本校の求める留学プログラムの実現に向けて、適宜、ケーススタディーや講演会等の計画・実行をする。	A		
事務部	デジタル人材育成の計画立案	本校が従来から実践しているデジタル人材育成に関わる教育活動を総括し、新たな教育活動との紐付けを行う。また、これらの教育活動に対する理解を教職員で共有するための研修を行う。	B	B	DX事業として、申請時の項目に従い、教育活動が実践できた、また、施設設備の整備に一定の目処が立った。
	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各分掌・教科と連携しながら事務を進める。	B	A	学校運営に関する各分掌・教科との調整を必要に応じて行うことができた。 施設の不備や破損個所を情報共有し、早期に着手することで施設管理を徹底できた。 より効果的な予算執行及び計画的な実施を今後の課題としたい。
事務部	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手するとともに、柔軟に施設管理の改善を行い、教育環境の整備に努める。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
第1学年部	自ら高い目標を定め、失敗を恐れず挑戦する姿勢を身につけさせる。	SHRやLHRで生徒に語りかけ、失敗が許容される雰囲気を作り、生徒が挑戦できる環境を整える。	A	A	教員が生徒に語りかけることで「挑戦する」ことは浸透しつつあるが、自ら具体的な高い目標を定め挑戦していく集団となるには至っていない。 学校行事では、学校内外と連携し、普段できないことを経験させて、視野を広げさせることができた。
		学校行事や部活動、国際交流など、高校生だからこそできる多様な経験を積むことを奨励し、視野を広げさせる。	B		
	自立した高校生としての生活・学習習慣を定着させる。	意欲的に学校生活を送れるよう、規則正しい生活習慣を身につけさせる。	A	B	長期休業の学習計画表等を書かせたり、面談を実施したりすることで、自立した高校生としての習慣を定着させるべく働きかけた。しかし、授業への取り組み方、家庭学習の習慣の定着度合いには個人差が見られる。今後、生徒が進路に対する意識を高め、自立した学習者となるよう、取り組みを工夫したい。
		教科担当者との連携のもと、授業を大切にさせ、家庭学習の習慣を定着させる。	B		
		適宜面談を行い、生徒の自発的な学習姿勢を育み、進路に対する意識を高める。	B		
	思いやりをもって、主体的に行動できるよう、生徒を導く。	学習活動や学校行事において、自分の頭で考え、自分のことを自分で決める機会を設ける。	A	A	文化祭、球技大会、研修旅行の計画作り、探究活動など、生徒が自ら考え決めていく機会を設定し、リーダーを中心に、協働して活動させることできた。自らの言動に気を遣い他者を尊重する大切さは、さらに強調していきたい。
		ICT機器を活用する力を身につけさせ、創造的な活動につなげる。	A		
		他者を尊重し、学習活動や学校行事で他者と協働する姿勢を持たせる。	B		
第2学年部	視野を広く持って高い目標に挑戦する心を育む。	南陽祭等、学校行事において、生徒自身で決定、実行する機会を多く作る。	A	A	文化祭実行委員会、体育祭実行委員会主体の行事運営を行った。また、研修旅行でも旅程の計画など、研修旅行実行委員会主体で実施するなど、自己決定の機会を多く設けることができた。 留学へは複数の生徒が挑戦し、クラスメイトにいい影響を与えた。
		部活動やコンテスト、留学など、自主的な活動の場を広げられるよう、関係分掌と連携し、工夫して情報提供を行う。	A		
	自立した学習のための生活習慣の確立を支援する。	教科担当者と連携し、授業、定期考査を中心とした、基本的な学習習慣を確立するよう指導する。	B	B	学習習慣の確立について、適宜指導した。 模試の振り返りは毎回欠かさず指導し、意識付けを行った。 学習への動機付けのため、進路学習に関わるHRを学年で複数回設定、実施した。
		定期試験、模試等の振り返りを丁寧に指導する。	A		
	人権感覚を涵養し、多様な価値観を認めあう、すべての生徒にとって居心地の良い環境を形成する。	生徒指導部と連携し、人権学習を適宜実施する。	A	A	生徒指導部と連携し、実際に差別を経験した方にお話していただくことで、効果的な人権学習を実施した。 清掃活動を十分に行うことができた。
		教室や施設をきれいに使用し、協力して良好な学習環境を作り出すよう意識づけを行う。	B		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
第3学年部	あきらめずに挑戦する姿勢を学年集団全体で形成していく。	あきらめないことや挑戦することの大切さを、学年集会や日々の授業で発信していく。また、模試などの分析を踏まえて学年独自の学習支援をしていく。	A	A	挑戦する姿勢の大切さを十分に発信できた。 雨で順延とはなったが体育祭を実施し、学校行事の機会を設けることができた。また、学年独自の行事も行うことができた。 学年集会などを通して、進路指導を生き方としての視点で指導することができた。
		学習活動のみならず、部活動や学校行事にも全力で取り組める環境を整える。	B		
		進路指導を単なる卒業後の進路としてではなく、生き方の指導としての共通認識を持って指導する。	A		
	主体的で能動的に学習する姿勢を身に付けさせる。	自習室や勉強スペースの環境を整える。	A	B	自習室などの勉強スペースの環境整備を行うことができた。 iPadの活用方法については十分に指導できたとは言えない。 スパートゼミなどにおいて教科と連携し、自立した学習を促すことができた。
		iPadを活用してのスケジュール管理やタスク管理を推進する。	B		
		自立した学習を促すための取り組みを教科と連携して行う。	B		
	難関大学および海外大学合格に向けた取り組みを行っていく。	授業レベルの向上、集団としての目的意識の高揚を図り、最難関大学の入試に適應できる学力を身に付けさせる。	B	A	学年集会などを通して目的意識の高揚を図り、スパートゼミや講習で最難関大学を目指す生徒の学力を向上させることができた。 進路指導部や英語科と連携して海外大学進学希望者の支援を行った。
		難関大学・海外大学進学希望生徒に対して、教科・分掌と協力しながら支援する。	A		
		教科・進路指導部と連携を取りながらスパートゼミや講習を最大限に活用する。	A		
サイエンス リサーチ科	数理・情報分野における基礎学習・課題研究を行う上での基盤を構築する。	近隣の大学と連携し、当該分野における学習や課題研究の充実化を目指す。	A	A	高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)の一環として、数理情報分野における学習・実習プログラムを新規に実施した(連携先:龍谷大学先端理工学部)。今後、連携を深めつつ、課題研究の充実を目指していきたい。
		外部人材を講師とした学習・研修会等を通じて、情報モラルや科学リテラシーの向上に努める。	B		
	探究活動を通じて、文理横断的な学びを強化する。	「夏季実習プログラム」、「サイエンス講座」等の校外連携の取組を通じて、探究活動を行うことの意義や目的(学術的な重要性・社会との繋がり等)について学ぶ機会を充実化させる。	B	B	近隣の大学や行政機関と連携した学習会・実習を計画通り実施できた。
		ICTを利活用し、課題研究(自然科学分野、人文社会科学分野)の相互交流を活性化させ、多角的な視点や発想の醸成に努める。	B		校内での課題研究発表会を異分野合同で行い、多様な研究テーマに関する交流の場を設けることができた。

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	自立した学習者の育成を目指し、ICTを活用しながら、生徒の主体的・探究的な学びにつながる授業研究、授業実践を行う。	A	A	各教員が創意工夫の中でICTを活用し、生徒の主体的・探究的な学びにつながる授業実践ができた。一方、実践事例の蓄積や共有については課題がある。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	学習活動や学校行事に主体的に取り組ませるとともに、思いやりを持って協働する中で、仲間意識や豊かな人格の成長を図る。	A	A	文化祭や生徒会行事において、主体的に取り組む雰囲気形成されている。 部活動への参加意識は、個人の差が大きい。 英検については、意欲的に挑戦している一方、その他のコンテストへの参加意識については課題があるため、より積極的な啓発が必要である。
		部活動やボランティア活動への参加を促し、各種検定やコンテスト等に挑戦する風土を醸成し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。	B		
	より高い目標を掲げ、主体的に学習する姿勢を身に付けさせる。	中高一貫校としての教育実践を踏まえ、生徒が相互に好影響を及ぼしながら、それぞれが「自ら学ぶ」集団を作り、確かな学力を身につけさせる。	B	B	「自ら学ぶ」ことができる生徒とできない生徒の二極化がある。中学校3学年が協働する「学びのアトリエ」では、先輩とともに学ぶことに戸惑う生徒も一部いるが、他学年との交流を楽しみながら主体的に参加する様子が見られた。また高校生の姿を見られるという中高一貫校の特徴が、自身の進路や目標を設定する上でもよい刺激となっている。
国語科	授業やスパートゼミの質を高めることにより、生徒の希望進路の実現及び社会生活に対応できる国語力を育成、伸長する。	難関大学の入試問題を研究し、その成果を授業やスパートゼミでの指導で活かすことにより、生徒の進路実現につなげる。また教科内で指導の成果を共有する。	B	A	生徒の進路実現のため、日々の授業や講習、スパートゼミ等で質の高い授業を追求した。 高校2年生では自分の進路に関わる本でビブリオバトルを行い、読書をする機会と自身の将来について考える機会を持った。
		生徒の知的好奇心を高め、生徒が主体的に学ぶ意欲が高まるような授業を展開するとともに、生徒に読書のおもしろさを啓発し、生徒の視野を広げる。	A		
	中高一貫を見通した指導体制を更に充実・発展させる。	生徒を多面的に評価するために、評価方法や評価材料を検討・改善し、効果的な指導につなげる。	A	A	生徒の多面的な評価のため、評価方法の検討や改善を適宜行った。 互見授業週間を大いに活用し、中学と高校の枠を越えて授業見学を活発に行った。また、その後に意見交流を行うことで効果的な指導を模索した。
		教材や生徒に関する情報共有を密にし、中高一貫校の強みを活かした指導を行う。	A		
地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びを実践し、自立した学習者を育む。	中高一貫教育の6年間を見通した指導内容の整理を行い、生徒が自立して学習できるようになるための指導体制を確立させる。	B	B	ロイロノートやプレゼンテーションソフトを活用した生徒主体の授業を実践し、授業担当者間で共有しながら指導を行うことができた。 指導内容の整理を進め、どの授業担当者でも実践ができるような工夫を重ねていく。
		主体的・対話的で深い学びについて、実施内容・評価方法を教科内で検討し、より効果的な学習につなげる。	A		
		ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を設ける。	B		
	難関大学進学をはじめとする希望進路の実現を支援する指導を行う。	模擬試験の分析や入試傾向の分析を行い、指導内容を検討・共有する機会を設ける。	A	A	スパートゼミや進学講習を活用し、生徒が入試問題に対応する力を育てることができた。 模試の分析や共通テスト対策の検討を行うとともに、各講座の生徒の把握や科目間の特徴の共有を図った。新課程の入試について、今後も検討を続けていく。
		スパートゼミ、進学講習などを効果的に活用し、生徒の希望進路実現に向けた取り組みを進める。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような質の高い授業を展開し、生徒自ら学ぶ姿勢を身に付けさせる。	A	A	各学年における、授業展開の工夫や課題内容を精選することで「学力の3要素」が身に付いている。さらに、授業外での個別指導などを行うことで、基礎的な数学力の定着を実現することができた。また、ほぼ全ての教員が必要な場面でICTを活用することができている。一方でその実践を共有する機会が少ないことが課題である。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。	A		
		BYODや中学での授業の実践を教科内で共有し、個々の教員がICTをより一層効果的に使えるようにすることで、生徒の数学的な判断・表現ができる力の育成につなげる。	B		
	数学を楽しみ、主体的に探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を授業参観や情報交換を通して教員間で共有し、実践する。	A	A	同じ学年を担当する教員間では密に連携をとり、指導方法などを共有し実践することができた。一方、学年を越えた全体での共有をする機会が少なかったことが課題である。授業や課題を通して楽しさを感じている生徒も一定数いる。総合的な探究の時間においてもその力が発揮できるように数学の魅力・面白さを発信していくことが重要である。
		数学検定やその他コンテストへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れたり、普段とは異なる数学の問題へ挑戦したりする機会を増やす。	A		
		数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	B		
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進捗及び指導方法について、適宜教科会議で共有し、進捗状況を確認する。	B	B	「自律した学習者」の育成のために、個々の教員は工夫し実践している。一方、それが中々共有できておらず、6年間を見通した系統的なものになっていないことが課題である。スパートゼミや講習については、普通科・サイエンスリサーチ科・中高一貫生が混在したモチベーションの高い学習集団の形成ができた。
		スパートゼミ・夏期講習・冬期講習の内容や進捗状況について、教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた指導方法を確立する。	A		
		「自律した学習者」の育成に向けた授業のあり方、課題設定のあり方について、6年間を見通した段階的指導を考え、実行する。	A		
理科	主体的に学ぶ生徒の育成	ICTを活用した主体的・対話的な授業を行い、思考力・判断力・表現力の育成を行う。	A	A	iPad等のICTを活用した生徒主体の探究学習を通して、思考力・判断力・表現力を育成することができた。一方、主体的な学習方法が十分身に付いていない生徒に対する指導方法については課題が残った。今後も個別最適な学びの在り方を研究し、組織的に指導する必要がある。
		個別最適な学びを目指し、効果的な授業の在り方や指導と評価の一体化について研究する。	B		
		模擬試験等を活用することで生徒の個々の学力や課題を共有するなど、学力伸長に向けた組織的な指導を展開し、最難関大学合格など自ら高い目標をもって進路を切り拓く能力を養う。	A		
	授業を起点とした探究活動の深化	観察・実験を充実させることで理科への興味を深めるとともに、生徒の挑戦心、自主性を育て、探究活動等において外部発表での受賞を目指すことができる生徒を育成する。	B	A	観察・実験の手法を重視し、探究活動を充実させることができた。中高一貫教育について、授業や指導の在り方を見直し、発展させることができた。
		中高一貫6年間の教育を充実させ、授業や実験の方法を見直すとともに、その成果を他クラスの授業だけでなく、サイエンス・総合的な探究の時間においても活用する。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
保健体育科	卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。	自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。	B	A	集団で活動に取り組む中で、運動の技能だけでなく協力して課題を解決する力やコミュニケーション能力等の育成に繋げることができた。 長距離走の授業では、自己の体力の現状を把握し体力の向上に努める意識を高めることができた。今後は、より主体的で質の高い計画・実践に取り組むことができるよう工夫を続けたい。
		運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。	A		
		学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた選択制授業を実施していく。	A		
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題を幅広く考える視点を養う。	A	A	幅広いテーマで課題学習を行い、主体的に探究・発表する姿勢が見られた。学習内容と発表の質をさらに高め、より価値のある実践を目指したい。 単に知識を得るだけでなく、現代の健康課題について自己の意見を持ち、より深い視点で考えることができるよう指導を行った。
		薬物乱用について正しい知識を身につけ、適切な行動をとることができる態度を養う。	A		
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる	表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	A	A	芸術活動を通して互いを認め合う力を醸成できた。
		鑑賞や制作・発表を主体的に行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。	A		
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、主体的に表現することができる力を養う。	B	A	発表や批評活動によって日本の伝統的な芸術や西洋音楽の魅力を味わうことができた。
		グループ発表・学習をおこない、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	A		
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	A	A	ICTやタブレットを効果的に用いることができた。 鑑賞、創作領域での新たな教材を研究することができた。 今後も積極的にICTを取り入れた授業を展開できるよう努める。
		学習者の知的好奇心を喚起させ、生徒が主体的に活動することができる環境づくりに努める。	A		
		多様な芸術について理解を深めさせるため、タブレットやICT機器の活用し、教科指導力の向上に努める。	A		

令和6年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重 点 目 標	具 体 的 方 策	評価		成果と課題
英語科	基礎学力の定着 自立した学習者の育成	CAN-DOリストに従い、4技能5領域(聞くこと・読むこと・話すこと(やりとり・発表)・書くこと)の活動を生徒の実情に合わせて授業に取り入れ、各自の到達度を確認させ、目標を設定させる。	A	A	4技能5領域の活動をバランスよく授業に取り入れた。教育用AIアプリを研究・実践した。考査毎に生徒が振り返りを行い、目標設定を行った。 従来の紙ベースの学習効果を見直す必要性を感じた。今後は、紙ベースとデジタルツールを効果的に融合させながら、生徒の学力向上に努める。
		目標達成のための学習方法を具体的に指導し、生涯に渡り、英語を学び続ける姿勢を育む。	B		
		AIアプリ等の教育用アプリについての研究・実践を進める。	A		
	英語でコミュニケーションを図りたい という態度の育成	知識を統合し、目的・場面・状況に応じて活用する力を身につけさせる。	B	A	高校3年生以外の全学年で「話すこと」(学期1回以上の口頭テストまたはプレゼンテーション)を実施。また全学年で「書くこと」(年間4回以上のエッセイライティング)を実施。意見を論理的に発信する力を育成した。 目的・場面・状況に応じて英語を活用する力を身に付けさせる授業方法について、さらなる工夫と模索が必要である。
		自分の意見を論理的に発信する力を養成するとともに、他者の意見を尊重する風土を醸成する。	A		
		分掌やALTとの連携を密にし、生の英語に触れさせ、学習成果をアウトプットする機会を充実させることで、生徒の英語学習への内発的動機付けを高める。	A		
家庭科	主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践する機会を単元または学期毎に1回以上持つ。	A	A	課題解決を意識した授業展開の中で、常に生活に生かせる教材を選定し、その上で、家庭での実践に繋げた。特にエコについては、1年間継続して実践することができた。
	授業におけるICTの効果的な活用を通して、生徒の興味関心や生活改善に向け、主体的に取り組む力を育む。	ICTの活用が時間短縮となりその分の時間が授業内容の充実に繋がる、効果的な活用の機会を昨年より増やす。	A	B	研修等の機会を生かし、教師のICT活用能力が多少なりとも高まり、授業での効果的な活用を積極的に進めることができた。また、ICTの効果的な活用で、生徒が主体的に学習を行い、かつ時間短縮で得られた時間により、学習を広げ深めることができた。さらに効果的な活用で学習効果を高めていきたい。
		ICTの利活用について、効果的な学習指導のための研修を3回以上行う。	B		
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。	A	A	情報の収集や分析において基本的なスキルを習得し、情報を評価する能力が向上した。 ネットワーク構築に関しては、IPアドレスの仕組みを知るとともに、実際に学習用端末を手動で操作して、校内ネットワークに手動接続する実践的な活動ができた。
		日常生活を題材にした課題を通して、現在の情報社会が抱える問題の解決について考えるとともに、コンピュータやネットワーク構築の仕組みに興味を持ち、家庭内などの小規模ネットワーク構築および管理ができるようにする。	A		
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	知的財産権を含む権利について深く学び、日常生活における身近な法規を理解し、著作権の保護、肖像権への配慮に努め、情報社会の一員として社会に参画する態度を養う。	B	B	Web上の知的財産権問題等を活用して「文化祭活動におけるBGMの利用の可否」等、日常生活の中での知的財産権に触れ、小テストを行って習熟度を測った。学習時期の偏りがあったため、今後はさらに題材を増やして定期的な小テストを実施し、知的財産権に触れる機会を増やす。
		ソーシャルメディアやインターネット等の利便性だけでなく、情報の信憑性の低さを理解させるとともに、BYODに関わる各アプリの個人アカウント機密性の高い情報の管理力を養う。	B		
	主体的に学ぶ生徒を育成する。	昨年度に引き続きタイピング能力の向上に努め、生徒一人ひとりが自身の考えをプレゼンテーション作品やプログラムとして作成できる基礎技術を養う。	B	B	ソースコードを写すだけで作成できる基本演習と、実行したい結果部分のみを伝えて自作のソースコードを作成する応用演習を合計50題以上行った。学習した内容を活用し、自分自身でアルゴリズムを構築することで、学習内容の定着と応用に努めた。
		プログラミングの基礎である順次処理、繰り返し、ループについて学習しつつ、どのように組み合わせることでコンピュータを思い通りに動かすことができるか試行錯誤する。	A		

令和6年度 府立南陽学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校関係者 評価委員会 による評価	○昨年度から生徒主体で計画・運営等を行っている状況であるが、更に生徒主体の行事となっており、生徒が大変生き生きしていた。 ○目標を高く持つことや、行きたい大学を目指すような声掛けにより挑戦する生徒が増えていることがわかった。 ○地域のオリンピック選手など、地域の人材による講演会等を検討してほしい。南陽高校の生徒であれば、自分の夢を叶えるための方法や考え方に刺激を受けるはずである。 ○特別支援教育コーディネーターの活用といった事案があり様々な支援が必要な生徒がいることや相談件数が増えていることを理解した。外部の関係機関との連携もさらに活用してほしい。 ○サイエンスリサーチ科の課題研究発表においてWEBからの情報をどのように生かすかが課題である。 ○生成AIの活用は知的刺激がないまま、利用すると重要な知識が抜けてしまう可能性がある。生成AIとの付き合い方を考えていくべきである。指導も難しい部分はあると思うが先生方も学んでほしい。 ○生徒・保護者アンケートにおいて、施設・設備への満足度に毎日使っている生徒とそうでない保護者とでは差がでる。予算に限りはあるが、より生徒の学校生活が充実したものになるようにしてほしい。
次年度に 向けた改善の 方向性	○生徒、教職員ともに「挑戦する文化」の醸成を推し進め、「生徒が育つ」学校への取組を深化させる。また、主体的、対話的及び探究的な学びの実践、授業におけるICTの効果的な活用をとおして、知的好奇心や科学的思考力を高める教育活動を実践する。 ○生徒が自ら学ぶ質の高い授業の展開や難関大学合格に向けた独自の取組「スパートゼミ」、さらに自学自習を支える教材の開発・提供を効果的に組み合わせて、希望進路の実現を図る。 ○生徒が企画・運営する学校行事・国際交流等の内容の発展、生徒会活動・部活動・地域連携活動の活性化など、生徒の主体的・協働的な活動や社会貢献・参画の機会を充実させる。 ○STEAM教育及びターム留学を軸とした中高一貫教育のさらなる深化を図るとともに、DXハイスクール指定を生かした探究活動を充実させる。